

ひょうたん島通信

大槌発! 第30回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいじまという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



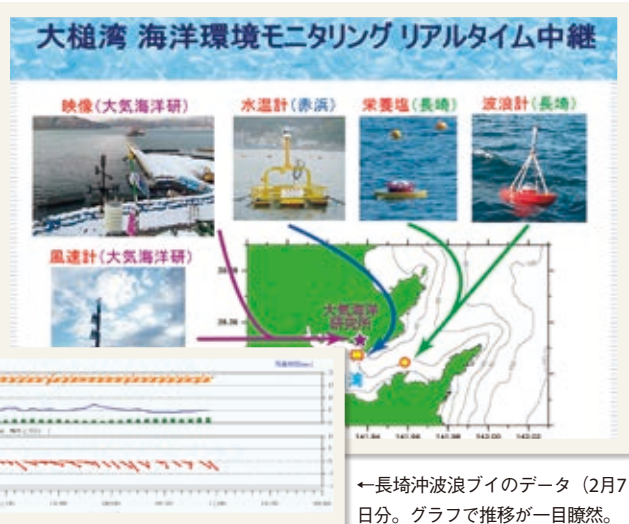
海洋環境情報のリアルタイム配信

田中 潔 大気海洋研究所附属
国際沿岸海洋研究センター 准教授

今号では、大槌湾の海洋環境情報をインターネット上でリアルタイム配信している取り組みをご紹介します。2012年3月の第3回通信では、大槌湾で海洋観測システムの復旧を急ピッチで進めていること、特にひょうたん島の横で水温の連続モニタリングを再開した様子などを紹介しました。その後、私たちは地域の方々からのご協力も頂き、海洋環境を監視する同様の装置を大槌湾に多数設置しました。その際、装置によって得られる時々刻々の環境データをインターネット上でリアルタイム配信することにも取り組みました。ウェブサイトへは、大気海洋研究所 国際沿岸海洋研究センターホームページ上のリンク画像（バナー）からや、「大槌湾海洋環境モニタリング」で検索していらして下さい。

水温計は前回ご紹介したとおり、海洋環境を監視する上で最も重要な装置です。水温は海水の密度を変化させて海流を作ったり、生物の生育環境を決めたりします。栄養塩（硝酸）計も、生物の生育環境や生態系システムを明らかにしていく上で大変重要な装置です。波浪計は地元

→リアルタイム配信のホームページ（現在は一部休止している項目もあります）。



漁師さん達と相談して、湾内で最も波が強い場所（外洋から沢山の波が進入してくる場所）に設置しました。2013年の秋に台風が大槌湾を直撃したときは、5メートルを超える波高を記録しました（良く耐えました!）。そのほかにも、海況を決定づける海上風を測定する風速計（ひょうたん島へ掛かる突堤上に有ります）や、海況が実際にどんな様子か目で見てすぐ分かるWebカメラも設置しています。

これらの装置は、三陸沿岸の海水がどこから流れて来てどこに行くのか？ ど

れくらい沢山の海水が流れているのか？ どんな海水（暖かい・冷たい、栄養分が多い・少ない、など）が流れているのか？ などを私達が研究する目的で設置しました。しかし、それと同時にリアルタイム配信には、地域の市民の方々にも大槌湾の海況環境に広く関心を持って頂き、私達の日々の研究活動に一層ご理解ご支援頂けるようにとの目的もありました。実際、地元漁師さん達がご自身の養殖場環境を研究することにも活用しましたとの声を多く頂くことも出来ました。

調査船「弥生」のつづやき 科学がもつ夢とロマン



国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早2年になろうとしています。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のびーちゃんの後を受け、このコーナーも担当することになりました。

新年早々、フィギュアスケートの羽生結弦選手が大槌町を訪ねてくれました。町の中心部を見渡せる城山や旧役場庁舎を回った後、小中学校で子供たちと交流しました。自身も被災者である羽生選手は、世界レベルの競技者として復興における無力感を度々口にしています。しかし、羽生選手と出会った子供たちの笑顔は、そんな思いを全面的に否定してくれたはずですが、形になるものは生み出さなにかもしれない。でも、羽生選手のスケートや生き様は、間違いなく被災者のみ

ならず日本中の人々に夢や希望を与えています。重機が山を削り、埃だらけのダンプカーが走り回るようになった大槌町を見ていると、むしろ今こそ、羽生選手のような支援が求められているような気がします。国際沿岸海洋研究センターの科学研究は、震災影響や沿岸生態系再生過程の解明など歴史的にも重要な形ある成果を求めて精力的に進められています。でも、そろそろ科学のもう一方の力である夢とロマンを紡ぎ出す成果を求めてもいい頃なのでは……。そんな事を考え

せられた一日でした。



工事の進むセンター周辺。左端に見える現センターは、中央道路右側あたりへ移転する。正面に浮かんでいるのが私（弥生）です。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）